マダム見聞録

No. 1 フィジーの国事情

藤井由佳（協同総合研究所）

Bula!（「ブラ」…フィジー語で「こんにちは」の意味）はじめまして。2004年5月より協同総研に勤務することになりました藤井由佳と申します。どうぞよろしくお願いいたします。赤羽の事務所で優しくて素敵な方々に囲まれながら、毎日楽しく働いております。今回、めでたく「協同の発見」にデビューさせていただきます。題して『マダム見聞録』。連載です。

私は、2001年12月から2003年12月までの2年間、青年海外協力隊の理数科教師としてフィジーで活動していました。これが冒頭でBula!と挨拶した理由です。現地の高校で数学を教えていたのですが、実はこんな私でも、フィジーでは「マダム」と呼ばれていました。男性教師は「マスター」、女性教師は「マダム」なのです。日本に帰ってきたいま、現地にいた頃とは違った視点を取り入れ、フィジーでの2年間を再考察したいと思います。テーマは、フィジーの食事情、教育事情、労働事情などいろいろと考えています。そして可能であれば、現地生活の中から協同を発見してみようと思います。

皆さんにもぜひ、南の楽園フィジーという国を知っていただきたいです。連載第一回目は、フィジー国の基本情報をお伝えします。どうぞお読みください。

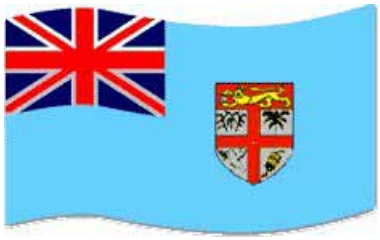
フィジーの国事情

フィジーが位置するのは、日本から南へ約7,000Kmの南太平洋のほぼ中央部。西経／東経180度、南緯18度を中心とする、13万ヘクタールの海上に散らばる島々で構成される島嶼国家である。（西経／東経 180度、つまり世界で一番早く朝が来る国。）日本からの直航便（週3便）が発着するナンディ国際空港や首都スバ市、多くの大型リゾートホテルのあるビチレブを最大の島として、島の総数は300以上。総面積は1万8000平方キロメートルほどで、日本の四国よりやや大きいくらい。その地理的位置のみならず、南太平洋の民族や文化が交差する島々として「南太平洋の十字路」と呼ばれている。総人口は約87万人。（佐賀県の総人口と同じくらいである。）うちフィジー系が

51.8%、インド系が43.6%を占め、その他5.3%となっている。フィジー系はほぼ100%がキリスト教徒。インド系はヒンドゥー教徒、イスラム教徒などに分かれ、ごく少数だが中国系の仏教徒などもいる。フィジーにいつから人が住むようになったのか、まだはっきりしたことはわかっていないが、紀元前1300年ごろ、東南アジア方面からニューギニアやニューカレドニアなどを経て渡ってきたのではないかと考えられている。ニューギニア方面の先住民族（オーストラロイド）との混血、フィジーの先住民族であるメラネシアとポリネシアの混血の人々が住んでいた。ヨーロッパ人によるフィジー諸島の接触は、1643年。オランダの探検家アベル・タスマンの航海の記録が最初である。その後のキャプテン・クックやキャプテン・ブライなどの航海者により、フィジーの島々はすべて確認されたが、ヨーロッパ人にとってフィジーに住む人々は凶悪であり、食人種であるとされ、実際に入植が始まるのは19世紀初めとされている。1844年、キリスト教宣教師が来島し布教を開始した。それに伴い、銃も持ち込まれたため、それまで6つの王国に分かれていたフィジーは対立が深刻化し、戦争がくり返された。この混乱を治めたのがザコンバウ王である。1854年、キリスト教へ改宗する。1871年ザコンバウ王はフィジー王として認められ、1874年、イギリスにフィジー譲渡を申し入れる。それから96年間、フィジーはイギリスの植民地となる。このときよりさとうきびプランテーションが始まり、インドから出かせぎ労働者が来島する。インド人は年々増え、やがて総人口の半数近くに達する。南

正式国名	フィジー諸島共和国（The Republic of Fiji Islands）
人口	86.8万人（2003年）
面積	18,333平方キロメートル
独立年月日	1970年10月10日
旧宗主国	イギリス
首都	スバ（Suva）
人種	フィジー系（51.8%）、インド系（43.6%）、その他（5.3%）（1998年）
言語	英語（公用語）のほかフィジー語、ヒンディー語を使用
宗教	フィジー系はキリスト教、インド系はヒンズー教またはイスラム教。全人口に占める割合はキリスト教52.9%、ヒンズー38.1%、回教7.8%、その他1.2%（1986年）
主要産業	観光、砂糖

太平洋の十字路としての位置を固めだしたフィジーは1970年10月10日に英連邦 30番目の自治国として独立する。その後の経済発展に伴い、フィジー人とインド人の対立が顕著となる。1987年には南太平洋初の無血クーデターを経験し、政権交代を何度も経て現在に至っている。



国旗：左上にイギリス国旗が描かれ、フィジーとイギリスの関係の深さを表している。地の水色はフィジーの空の色。右側にある盾はフィジーの国章で、中には産物のさとうきび、椰子、バナナが描かれている。海上では空の色と区別するため、水色部分が赤になった旗を使用する。学校では毎朝国旗掲揚し、週に一度国歌斉唱をする。独立記念日が近づくと、国旗が描かれた商品が売れ行きを伸ばす。中には自動車に小型の旗を付けて走っている人もいる。

フィジーは開発途上国である。開発途上国の中にも、アフガニスタンやカンボジアのように後発開発途上国と分類される国々もあるので、フィジーは開発途上国の中でも比較的恵まれた国である。ちなみに日本は世界で31カ国しかない先進工業国の一つである。

途上国と聞いて想像するのは、食べ物も電化製品も何もない様子。しかし、実際はそうではない。首都に行けば何でも手に入る。フィジーの首都スバでは、コンタクトレンズも購入できるし、映画を観ながらポップコーンだって食べられる。ソニーのテレビゲーム機プレイステーションも売っている。ただ、その便利さは首都に限ってのことで、地方あるいは離島では、まさに何もない場合もある。フィジーに赴任して最初の1ヶ月間の現地訓練中に首都で過ごし、その後、地方にある勤務先に引っ越した私は、生まれて初めて生活の不便を経験した。そして、この首都と地方の格差が途上国の姿なんだと実感した。

国	乳児死亡率（1歳未満）2002年	1人当たりのGNI（米ドル）2002年	出生時の平均余命（年）2000年	成人の総識字率（%）2000年	初等教育純就学／出席率（%）1996-2002年
アフガニスタン	165	250	43	36	36
フィジー	17	2,160	70	93	99
日本	3	33,550	81	ー	100

世界子供白書2004より

乳児死亡率･･･出生時から満1歳に達するまでに死亡する確率。出生1,000人当たりの死亡数で表す。
1人当たりのGNI･･･GNI（国民総所得）とは、すべての居住生産者による付加価値の額に、生産評価額に含まれないすべての生産品税額（補助金は控除）および非居住者からの1次所得（被用者の報酬および所得税）の正味受取額を加えた総額である。1人当たりのGNIは、国民総所得を年央の人口で割って算出する。1人当たりのGNIの米ドル換算値は世界銀行アトラス計算法によるものである。
出生時の平均余命･･･新生児が、その出生時の人口集団の標準的な死亡の危険のもとで生きられる年数。
成人の識字率･･･15歳以上で読み書きできる者の比率。
初等教育純就学／出席率･･･国連教育科学文化機関（ユネスコ）統計研究所が報告している初等教育純就学率と、国別世帯調査で報告された初等教育出席率から算出されたもの

フィジーを語るにはまずそこに住む人々のことを紹介する必要がある。彼らの国民性を知らないと面白い話も面白くなくなる。

フィジー人は人懐っこい。写真を見るとわかっていただけるだろう。こんな笑顔で「Bula～! Bula～!」と言いながら、まるで何十年も前からの友達のように寄ってきて抱きついてくる。すごく重い。どこから来たのか、旅行で来たのか、フィジーは好きか、などと矢継ぎ早に聞かれ、私が日本から来て、どこそこの高校で教師をしていると言うと、「あら～。家族と離れて一人でなんて。なんてかわいそう。さみしいでしょ。ご飯きちんと食べた？うちへいらっしゃい！」と半ば強引に連れて行かれる。フィジーの生活にまだ慣れてない赴任当初の私は、彼らの懐の深さに本当によく助けられた。歩いているとどんなに遠くからでも名前を呼ぶ。「フジイー！！」（FujiiがFijiに似ているので覚えやすい。）私は「誰？どこ？」と思いながら、一応手を振る。彼らにとって挨拶は日常に欠かせないことの一つ。声を掛け合いながら相手の様子を確認し、世間話で情報収集をする。毎日こうしておけば、電話がなくても連絡事項が勝手に皆に伝わる。運が悪くて聞きそびれる人もいるけれど。それに、尾ひれの付いた噂話もきちんと伝わってしまうけれど。

フィジー人には笑顔がよく似合う。すれ違いざまに目が合うと、必ずニッと笑いかけてくれる。彼らはよく笑う。笑うことも好きだが、笑わせることも好き。友達同士で冗談を言い合ってはげらげら笑っている。

彼らはよく話す。暇さえあれば、いや暇がなくてもいつまでもしゃべっている。それに話が非常にうまい。顔の表情が豊かで抑揚があって、例え言葉がわからなくても、その姿についつい引き込まれる。彼らは知らない人にもお構いなく声をかける。いつでもどこでもぺちゃくちゃ。そんなフィジーを思い出すと、人々が黙々と歩いていたり、ブスッとした顔で電車に乗っていたりする日本の様子に何とも言えない寂しさと異様さを感じる。

彼らはよく歌う。誰もが例外なく上手に歌う。何曲もそらで歌える。フィジー語の歌、英語の歌、聖歌からポップスまで何でもいける。一人が歌うとみんなが歌い出して大合唱になることもしばしば。ソプラノ、アルト自由自在に歌いわけるので、教会で聞くとその素晴らしさに圧巻である。

娯楽がなくても楽しんで暮らせるようになっているのだ。

フィジーではご想像のとおり時間がゆっくりと流れている。物理的には1日24時間だが、気分的には24時間ではない。そんなところに住む彼らは、よく言えばのんびり、悪く言えば面倒くさがりである。その面倒くさがりがフィジーの発展を遅らせていると言っても過言ではない。何にもしないときは本当に何もしない。ただ寝転んでいるだけ。ぼーっと座っているだけ。丸1日無駄にしても全く気にならない。私はそんな彼らに対して驚いたし、腹が立つことも多々あった。フィジーに旅行で来ているのであれば、都会の喧騒から逃れることができて心もからだもリフレッシュ、と満足できるが、彼らと一緒に仕事をするのだ。が、やがて気づく。急いだって仕方がない。時間はたっぷりあるさ、ゆっくりやろう。それに面倒くさがりという性格が誰かを傷つけることがあるだろうか。そう考えると、わりといい欠点のような気がしてくる。究極の面倒くさがりと一緒にいると、いらいらすることに飽きてゆっくり待つようになる。椰子の木の葉が風で揺れて重なり合う音を聞いてみるのもいいし、浜辺に行って波を見ているのもいいし、ちょっとひと休みして甘いにおいのするフィジーの空気をぐいっと吸い込んでみてもいいかなと思えるようになる。そして日本人だった私もどんどんフィジー化していく。

今回はフィジーの主に陽の部分を紹介しました。これからゆっくり陰の部分も書いていこうと思います。それでは、Moce.（「モゼ」…「さようなら」）

参考：フィジー政府観光局ホームページ　http://www.bulafiji-jp.com
世界子供白書2004　国連児童基金（ユニセフ）